

## 講演会「ロシア児童文学の思い出」

詩人、作家、童話作家、日本文芸家協会会員 三木 卓

ご紹介いただきました三木卓です。今日は児童文学の講演ということで、角野栄子さんからいただいた『魔女の宅急便』のネクタイを締めてきました。角野さんとは鎌倉で仲間ですし、大学でも同窓みたいなもので、親しくさせていただいています。

久しぶりに上野に参りました。鎌倉に住むようになって30年経つので、上野に来ることはあまりなくなりましたが、若い頃は、上野は好きでよく来ました。ここは、美術館、音楽会の会場、動物園、科学博物館、児童図書館まで、本当に何でもあります。ここへ来ると、自分も何かしなければいけないと、いつも励まされているような気がしていました。真夏に来ると東京文化会館前の大きなクスノキにアオスジアゲハが飛んでいたのが、今日はどうかと思ったら、やはり1匹飛んでいました。アオスジアゲハはクスノキが好きで、あの木から離れられないのだと、何十年ぶりに見て思ったり、それから、ブルデルの「弓をひくヘラクレス」や、ロダンの「地獄の門」などを眺めたりして参りました。やはり上野の空気というのは夢があつていいな、と思いました。それはおそらく、日本近代の発展を上野は象徴しているからではないでしょうか。

今日は「ロシア児童文学の思い出」という話をするのですが、私は、児童文学も、ロシアの児童文学も好きですが、職場を5年ごとぐらゐに変わる悪い癖があり、あちこち転々とするたびに本がなくなつてしまひ、自分が書いた本、訳した本まで失くしてしまつています。この「ロシア児童文学の世界」という展覧会で講演をしてほしいと松谷さやかさんに頼まれた時には、「とにかく、何も失くなくて何ともわからない。児童文学の歴史ひとつ手元にないのだから。」と言うと、松谷さんに、「ロシア児童文学の世界の図録に児童文学の歴史が書いてあるから、それを読めばいろいろと動き出すわよ」と言われ、早速送っていただいて読みましたら、いろいろ思い出しました。おそらく今まで日本でロシア、ソヴィエトの児童文学の歴史が形になって出たことはなかったのではないかと思います。そのような通史のようなものを手にした記憶もなく、また誰かが読んだという記憶もありません。それぞれの本についている解説を読むしかなく、それをつなぎ合わせた知識しか私にはありませんでした。

そういう意味からして、今回のこの図録は、松谷さんが大変丁寧に、状況をいろいろ考えながら、今の私たちに与えてくれる一番いいものとして出来上がっています。しかも展覧会の図録ですから写真もたくさん入り、本も細かく紹介されて、一つ一つのすじまでついていて、大変な努力だったと思います。1冊1冊の本にすじをつけることは、やる方にし

たら大変なことです。読む方はなんとなく読むだけで、勝手なことを言う人もいますが、研究者として仕事をしていると、あらずじや概略が書かれている本はとても助かります。これを見ると記憶が間違っていなかったことを確認できたりします。そういう意味でも、この1冊は非常によくできた、いわばロシアの児童文学の歴史を知る上で一番いいもので、それが2005年になってやっとできた、と思いました。どうか皆さん、展覧会をご覧になった後にお買いいただけるといいと思います。見た記憶とこの図録があれば、その後ロシアの児童文学についての考えが、心の中で大きく広がっていくのではないかと思います。まず、私自身が大いに助かりました。これがなかったら、今日ここに座っていられなかったと思っています。

私がロシアに関心をもつようになった理由を考えると、一つは、私が中国の東北の大連という街で過ごしたことが大きく関係している、と思います。1937年から1943年までの6年間を大連で過ごしました。私は1935年生まれなので、2歳から小学校2年生までいたこととなります。大連という街は、そもそもは青泥窪という名前の漁村でした。そこが港になった時には、冬になっても凍らないという利点がありました。不凍港だったので、ロシアの港はどこも凍るので、凍らない港をロシアは非常に欲しがっていました。ロシアはいつも南下していく政策をとっていました。それはやはりいろいろそういうような事情があったのだと思います。

ロシアが大連を手に入れたのは、明治27、28年の日清戦争の後です。細かいことがいろいろとあって、あるいは日本と清国の戦争だけではなく、ロシアも関係したのだと思います。ロシアが大連を割譲してもらって手に入れます。それが明治28年(1895年)の話です。ロシア人はやっと凍らない港を手に入れて喜んで、そこに街をつくりました。いわゆる「アカシアの大連」といわれますが、アカシアを街路樹にしたところにロシア風の家をどんどん建てました。私の友だちはアールデコだ、と言っていました。アールデコよりもっと前の、世紀末のヨーロッパ美術の影響を受けている街で、おそらくパリのような街の、真ん中に広場があり放射状に道路が出ているような街づくりをしているのだと思います。

それから10年後の明治38年に日露戦争があり、日本が勝ったので、旅順と大連を日本が手に入れてしまった。いわば、出来上がったほやほやの街を、日本が取ってしまったのです。大連とはそういう街です。10年間かかってロシア人がつくった街を日本が取ってしまって、関東州という租借地の一部として、大連と旅順を日本が使うということになる。そこに私は1937年(昭和12年)に、父の仕事の関係で行くことになりました。ですから、街全体の構造や雰囲気は全部ロシアのものが生々しく残っていたのです。さすがに今は全日空ホテルや高層ビルがどんどんと建って、大連の街も変わってしまいましたが、戦後になって私が行った1980年頃には、まだそっくりそのまま街が残っていました。ロシア人がつくった波止場なども残っていました。私が住んでいた頃には、日向ぼっこをしながら編物をしているロシア人の白系のおばあさんの横でねこが寝ている。ロシア料理のお店では

スープやピロシキを売っている白系露人のお店があったりした。そういう中で私は育ったので、ロシアに対する親近感はずっとありました。それが素地にはなっていると思います。なかなか中国とロシアの関係は複雑なので、戦後になってはじめてハルビンへも行きましたが、かつてハルビンには白系ロシア人の街があって、ロシア語が通用しました。キタイスカヤというロシアンタウンは石畳が有名で、みんなが憧れた所です。加藤登紀子さんのお父さんや李紅蘭など、みんな体験していると思います。そこにも行ってみましたが、驚いたことにロシア文字が全部なくなっていました。たとえば、1905年と書くときに、1905と年（Г.）と書きますが、その年（ゲー）だけが盛り上がったモルタルの上に残っているくらいです。あとは完全にロシア文字がなくなっていて中国人の街になっていた。キタイスカヤの石畳は全部ありました。あの街はそっくりそのまま残しておいた方が、中国のためにもいいと思いました。

私の父は若い頃、詩を書いていましたが、当時は新聞記者をしていました。それでも文学や芸術が好きだったので、私たちにいろいろな本を与えてくれました。その本をいくつか思い出すと、たとえば、昭和の初年に改造社から出版された「現代日本文学全集」は、私にとって決定的だったと思います。これは、3段組のオレンジ色の厚い本で、1冊1円でした。円本といいます。これが文学全集のはじめてで、羽根が生えたように売れました。

当時は文学者というのは、だいたい食べていかれないということになっていましたが、円本ができたので、みんな家を建てることができたくらいです。文学はお金になるというのは、そこらへんから出てきた神話みたいなものです。

昭和4年に出版された第33篇に「少年文学集」がありました。この本を父が私に渡してくれたことが大きかったと今になって思います。おそらく編集をしていたのは、書いてありませんが鈴木三重吉だと推測します。一番後ろに鈴木三重吉の「古事記物語」が入っていて、最初に巖谷小波の「こがね丸」が収録されています。「こがね丸」からはじまり、幸田露伴の「番茶会談」や、森田思軒が訳した「十五少年」、若松賤子が訳した「小公子」、芥川龍之介の「杜子春」「魔術」など、入っていました。佐藤春夫、宇野浩二、島崎藤村、北原白秋の童謡が入っています。そういう本を渡されて、さすがに「こがね丸」は小学2、3年の私には無理でしたが、若松賤子の「小公子」は今読んでみると少し変な日本語で、当時もちよつと変な日本語だと思いつつもしかしこれは読めたので、一生懸命読みました。この「少年文学集」第33篇は、近代日本の児童文学の粋とも言うべきものを抜粋したものが、全部集められていた本です。おそらく中心になっていたのは「赤い鳥」に載ったもの、あるいは「赤い鳥」が喚起したものによって書かれたものだったのではないのでしょうか。それを父が渡してくれたことが、私の児童文学に対する関心のはじめです。

今考えてみると、父は児童文学の編集者をしていたことがあるのです。父は静岡県御前崎の近くの村の出身です。その榛原中学の卒業生です。当時、赴任されてきた美術の先生と父は仲良くなって、その先生が川上四郎でした。この方は、後に児童文学の童画家としていい仕事をたくさんされた方です。その川上四郎と仲良くなった。川上さんは先に東

京に出て行って、童画の世界に飛び込んでいった。その時に、食うに困っている父を呼んでくれたらしいのです。それで、父は実業之日本社に飛び込むことができ、編集者として、児童文学の仕事はかなりやっていた時期があり、自分でも書いていたようです。満州の私の家には、何冊か「赤い鳥」がありました。何が書いてあったかは覚えていませんが、「赤い鳥」があったことは覚えています。

そんな父がいろいろな本を渡してくれました。ロシア関係では、イリンの「灯火の歴史」です。その頃の私はイリンという人を全く知りませんでした。後にマルシャークの弟だと知った時には驚きました。イリンが、人類が灯火をどうやってつくって発展させてきたかということ、子ども向きに書いています。黄色い本で、青い色箔を押している本でした。今でも覚えているのは、人類は長いこと獣脂ろうそくを使っていたのですが、ある時ステアリンでつくった近代的なろうそくが変わって嫌な煙や臭いがなくなり、とても洗練された明かりになったというくだりを読んだことです。たぶんエジソンの白熱電球の発明まで書かれていたのではないかと思います。

そういう科学読物に、最初に出会ったことは私の中で大きなことだと思っています。後になって、ジョージ・ガモフが書いた「不思議の国のトムキンス」と出会っています。ガモフはアメリカで暮らしましたが、もとはロシア人です。いわゆる最近流行りのビッグバンの理論を最初に唱えたのは、ジョージ・ガモフです。そういう意味では、ガモフは超一流の物理学者です。ガモフがビッグバンの理論を立てたのは 1940 年代だと思います。私たちには難しかったですが、理論物理学の面白い啓蒙書を書いていました。高校の時には、アイザック・アシモフの科学系の本を読みました。この人はアメリカの SF 作家ですが、名前からみてもロシア人です。化学者ですが物理学にも通じていて、非常に面白い啓蒙書をたくさん出しています。おそらく、ロシアの児童文学の中の自然科学の部分は、辿っていくと、ある伝統をもったものではないかと思っています。ガモフもアシモフの本も優れているのだから、おそらくみんなひとつながりになっているのだと思います。イリンの「灯火の歴史」は、私が小学校 3 年生の時に読みました。「ハックルベリー・フィンの冒険」なども一緒に読んでいた頃です。

その頃父から渡されたもう 1 冊が、バイコフの「偉大なる王」という動物小説です。本を見ると、H・バイコフと書いてあります。しかし、父は「これをエイチと読んではいけな  
いよ。ロシア語だからエヌと読みなさい。」と言いました。ロシア語だと、H は N になるのだと知るわけです。長谷川濬が訳しました。父はその頃、満州日日新聞に勤めていました。バイコフはウクライナの出身だったと思います。兵隊として満州へやってきます。当時ロシアでは、東清鉄道という満鉄の側に接する、シベリアからつながってくる鉄道を敷設する権利をもっていて、いわば鉄道を敷設するのを守る守備隊のような役割の軍人として来ていました。ところが、バイコフはとても動物好きだったので、理解のある中隊長が、宮廷と関係があったらしく権力をもっていたらしいのですが、彼に満州の自然を探索させることを許してくれたのです。

それがもとになって書かれた小説が「偉大なる王」という動物小説です。これはアムール虎の話です。雄の虎です。百獣の王です。ワンというのは王です。中国に、張り子の虎で頭を押すと動くおもちゃがありますが、その額のところには王という字が書いてあるはずで、ですから毛の生え方が王という字に似ているのだと思います。後ろには、黄色地に黒で大という字が浮き出ていました。つまり大王です。あの辺りの密林の王者の虎の話です。本を渡された当時は、長谷川濬さんの訳が少し堅かったのか、難しくてよく読めませんでした。長谷川濬さんは、作家の長谷川四郎さんのご兄弟です。また、「丹下左膳」を書いた流行作家の林不忘とも兄弟です。この兄弟は面白い兄弟です。その頃の私はこの作品をきちんと読めなかったですが、とても怖かった場面だけはよく覚えています。

一人の男が悪いことをして、裁判で死刑を宣告されます。その死刑宣告というのは、偉大なる王の餌食にするというものです。帽子をかぶせて見えないようにして、森の中の柱に縛り付けます。正体を無くすくらいに無理やり焼酎を飲ませて、みんな帰ってしまいます。するとそのうち、偉大なる王が現れてこの罪人を処分するのです。この場面は、小学校3年生の私には、こういう処刑の仕方があるのかととても怖かったです。

これが文芸春秋から本になりました。菊池寛が「これこそ満州のジャンクルブックだ」と褒めたそうですが、後にその本を古本屋で買って読んでみると、堂々たる叙事詩でした。本当に荘重で見事なものでした。私は、バイコフという人を見直して、その他の作品も読みました。バイコフは満州の自然とともに暮らしたのですが、1917年の革命時には、<sup>はくぐん</sup>白軍の方に行くので、結局国に帰れずに、一旦はインドまで行き、そして革命後に満州に潜入して、満州の自然の中を取材していろいろな作品を書くことをやっていた人です。たいへん特異な人ですが、最後はオーストラリアのブリスベンで亡くなりました。

私は1980年に再び満州へ行った時に、<sup>ぼたんこう</sup>牡丹江から南へ下ってみました。その辺りは東満州で、今自分が来ているところは「偉大なる王」という虎の一代記が書かれたところだとふと気が付きました。そこには、バイコフが調査をしていた<sup>きょうほくこ</sup>鏡泊湖という湖がありました。私は山の方まで入ってみて驚きました。とてもきれいな緑の草原でしたが、車から一歩外に出ると地面がうなっていてハエやぶよがたくさん発生していました。

考えてみると、「偉大なる王」の中に、雌の虎がぶよに悩まされる場面があります。私たちは、自然が美しいと簡単に言っていますが、「ああ、このことだったのか」と実感しました。吸血性のぶよがたくさんいる中で、私たちもそのぶよを払いながら斜面を上がっていきますと、突然、真っ白い肌の白樺の林が出てきました。それはそれで清純そのものです。人が全然触ったことのない真っ白い白樺です。軽井沢辺りの汚れた白樺ではありません。そんな素晴らしい白樺の林が目の前に広がった時には驚きました。なるほどこれが自然というもので、バイコフが出会った自然はこういうものだったとしみじみと思い感動しました。そんなことがあり、ロシアの自然文学や児童文学に気持ちが向くようになったのではないかと思います。

それから、いろいろな人に出会いました。なぜか私が出会う優れた人はみな、児童文学

が好き、あるいは児童文学の仕事をしている人が多いようです。不思議なくらいそういう人たちに出会って私は生きてきています。ですから、私がロシアの児童文学に関心をもつようになったのは、父からはじまり、周りの人たちの影響からだと思います。

私は 1955 年に早稲田大学文学部ロシア文学科に入りました。その頃のロシア文学科は、就職に関しては悲惨極まりないところでした。学生運動の巣窟のようなところでした。前年の 1954 年のロシア文学科入学者は全員「入学しても絶対に学生運動は致しません」という誓約書を書かされたそうです。岡沢秀虎という先生が全員に書かせたのです。新聞でも、そんなことを入学試験でやらせてもいいのか、と問題になりました。最後の面接時に、誓約書を書きなさいと言われれば、みんな受かりたい一心で書くはずです。岡沢先生は、生きてくる中で思想的にご苦労された方なので、早稲田の露文科を守ろうとされたことで、決して悪いことではなかったと思います。いずれにしても露文科の連中は、卒業後は労働組合に入って運動でもやるのだらうと思われるでしょうから、就職はとて無理だろうという気持ちでいましたし、事実そうでした。また、屈折した者も多かったわけです。他には、結核のため国立を受ける気力がないから来た、という人もずいぶんいました。5、6 年遅れて来た人がたくさんいましたので、現役で入った人は小さくなっていました。

私が入学した 1955 年に、理論社からビアンキの「森の新聞」がはじめて翻訳されて出ました。この時点で出た本は、タカクラタローさんと内田莉莎子さんの共訳だったと思います。それを見た時に、やはり興奮しました。高等学校の頃、小笠原豊樹さんがマヤコフスキーを訳して、彰考書院から出された本を読んだ時も興奮しました。外語の現役の学生がマヤコフスキーの翻訳をしているのですから、後で原文が少しわかるようになってから見るととても難しかったので、よくこれを小笠原さんは訳したなあとますます驚きました。

ビアンキの「森の新聞」に出会った時はとてもショックを受けました。「森の新聞」というのは、森を 1 年に区切って、新聞の形で森の生態を紹介するものです。今日ここに持ってきたのは最近の「森の新聞・秋」(『ビアンキ動物記 20』 理論社) ですが、秋の文の最初の見出しのところを読んでみます。森の新聞第七号／渡り鳥が故郷に別れをつげる月／秋の第一の月／九月二十一日から十月二十日まで。ここで見出しが、太陽は天秤座に入る。秋のはじまり／森のできごと／市のニュース／鳥たちの越冬地への出発／森のたたかい。というような見出しが立っています。新聞の形式になって、1 年間の森の動物の生態を観察したものが書かれています。着想がまた素晴らしいと思いました。最初と最後の行で、同じ鳥が渡って帰ってくるようにつながっています。ちゃんと円環を出すように書かれています。ビアンキは素晴らしい人だと思いました。

ロシアの自然文学では、たとえば、プリーシビン、パウストスキーなどもいました。私の友人で中里介山の甥で中里迪弥君がいました。中里介山の甥ですから、西多摩郡の村に住んでいて、趣味が猟銃です。山の中を猟銃を持って歩いて撃っている。河上徹太郎さんのようなことをやっていたのです。彼は私に、一生懸命パウストスキーの話をして、自然文学の本が出せればと言っていました。しかし当時は、政治的な文学が流行っていました

ので、自然文学はなかなか出してもらえない時代で、私はその頃出版社にいましたが、彼の希望をかなえることができなかった。そのうち彼は亡くなってしまいました。そんなことを今思い出します。プリーシビン、パウストスキー、スラトコフなどが、ビアンキの後に出てきます。歳は 25 歳くらい違いますが、ビアンキの仕事を継いで、「水の新聞」という本を作ったり、スラトコフは「北の森の十二か月」というとても面白い本を出したりしています。いわば、ロシアの自然文学の伝統が非常に熱い形につながってきていると思います。その流れがあったので、私たちはずいぶん救われたというか、ソヴィエト時代の辛さというのがあったので、その中で自然文学は政治的なものにあまり影響されずに、ずっとつながってくるのができたのではないかと想像します。

それから、私が子どもの頃に印象深く読んだのは、トルストイの民話でした。母がクリスチャンだったからかもしれませんが、「おまえさんは、トルストイの民話を読みなさい」とよく言ってくれました。私はいろいろ読みました。今思い出すのは 3 つくらいあります。1 つは、「人はどれだけの土地がいるか」という作品です。パフォームというお百姓が、広い土地をもつとたくさん収穫があるからと、広い土地を求めてどんどん移住していき、大富豪になろうとする物語です。最後に変なことに巻き込まれます。辺境の遊牧民族のところへ土地を安く売ってくれるというので行くと、1,000 ルーブルで 1 日に歩いたところを全部売ってくれるというのです。ただし、日暮れまでに出発点まで戻ってこないと獲得したことにならないというのです。百姓は欲の極限まで広く取って、帰ってこようとします。そして、苦勞してやっと土地を手に入れます。

そこのところを、トルストイは実に上手く書いています。なるべくたくさん土地を手に入れたいので息も絶え絶え帰ってくるのですが、もう間に合いそうにないとあきらめかけたところで、岡の上からみんなが、まだ太陽が見えるから早く来いと呼んでくれるので、さらにながらんで、岡の上までたどり着いたところでばったり倒れて死んでしまいます。人はどれだけの土地がいるかという、要するに棺おけを埋めるだけの土地があればいいという話です。これは、強烈な印象を私に残した作品でした。無常感のようなものが、その時から私の中にできたような気がします。お墓なんてなくてもいいけれど、放っておくわけにもいかないし、誰かが埋めなければならないし、そうすると人間は、埋めるだけの土地があればいいのだと思うようになりました。

わりと宗教色のある作品が好きになっているのです。私は宗教くさい人間ではないのですが、「ろうそく」という作品が好きです。農地に意地の悪い農奴あがりの管理人がいます。トルストイは農奴あがりの管理人が一番たちが悪いと書いています。トルストイは大地主ですから、これはおそらく実感だと思います。いろんな人を管理人として雇った経験から、成り上がってくる人はよくないという考えをもっていたと思います。トルストイは何度かそういう人間のことを書いています。アメリカでも、黒人で出世した人は、意外と黒人に冷たいと言う人がいます。案外そういうようなところがあるような気がします。成り上がりの管理人が、無理難題を言ってこき使うので、皆は怒って今度はあいつをやっつけよう

と相談しはじめます。しかしその中で一人だけ話にのらない男がいて、その男はただ言われたとおりに鋤を使って畑を耕しています。

ある日、その男の鋤にろうそくが 1 本ともっています。鋤をいくら動かしてもろうそくの火は消えません。彼は復活祭の歌を歌いながら鋤を使っています。風であおられても火が消えることはありません。そのことを管理人が知って、そこに神の存在を感じ、顔色を変えて破滅していくという物語です。私のイメージとして、この「ろうそく」はすごいのです。トルストイの創作か、あるいは民話の中のことかはわかりませんが、これはすごいのです。他にも、3 人の隠者が海の上を走るように渡ってくる話があり、とても宗教臭いのですが、私の中ではとても生き活きとしたモチーフで生きています。トルストイの民話は、非常に教訓的です。民話といっても、フォークロアとしての民話ではなく、トルストイ自体のキリスト教イデオロギーのようなものが入っていても、やはりそれはすごいのです。教訓的で嫌だと思いつつも、そこにはトルストイの働く人たちへの深い愛情を感じられます。トルストイの中でも、非常にトルストイらしい愛情がにじみ出ているいいものではないかと思いつつ、トルストイを語る時に民話は外せないと思いつつ。

地主であったトルストイの作品の「アンナ・カレーニナ」を読みますと、農奴解放になって、農奴も地主もこれからどうやって生きていったらいいかわからないで、両者ともに戸惑う場面が出てきます。地主だから悪い奴だ、農民だからかわいそうということとは少し違う様相が「アンナ・カレーニナ」には書かれていて、こういう人々が 1917 年の革命の時に大変なことになるのだなあと思うと、また感慨があつたりします。

ロシアの民話としては、トルストイのものはイデオロギッシュですが、ロシアのフォークロア、たとえば「おおきなかぶ」はとても愉快です。かぶぬき連合軍のメンバーは参加していく順にだんだん小さくなります。最後はねずみです。ねこがねずみを呼んでくるのは、法則に合わないような気もしますが、だんだん力の弱いものになっていき、最後の一線はねずみがやってのけたというところが、本当に素晴らしいと思いつつ。ロシアの民話は、やはり長い間識字率が上がらなかったのも、文字化される前の言葉が、広大で、しかもいろいろな民族の侵入による不安定な世界の中で培われてきたので、野放図で途方もないところがあつたり、知恵があつたり、読み方によってはいろんなふうにも読めるので、面白いです。私もいくつか翻訳をしたことがありますが、ロシアの民話は私たちには一言では言い尽くせないような捉えどころのない面白さがあり、いろいろな要素が混ざつていながらもロシアを感じます。

もう一つ思い出について語るとすれば、それは絵本です。ロシアの絵本に出会ったことの驚きです。日本の近代の児童文学は大正 7 年 7 月に「赤い鳥」が出たところからはじまったのではないかと考えています。鈴木三重吉が編集で、北原白秋がそれに大きく協力するのですが、その「赤い鳥」が出たところから、いわば近代文学としての日本の児童文学がはじまったのではないのでしょうか。前年の大正 6 年がロシア革命の年です。ロシアでも、それまで優れた児童文学が出ていましたが、ロシア革命によって、国家が幼い子どもたち



に何を読ませるかということ意識しはじめました。そのことは、いい意味もありますが、悪い意味の方が多いかもかもしれません。いい意味では、1920年代には面白い本がたくさん出てきました。特に、未来派や構成主義に影響を受けた人たちはなかなか斬新な面白い仕事があります。1930年代になり、第1回のソヴィエトの作家大会があってからは、いろいろなことがあって、だめになった。政府の干渉、特にスターリンの干渉があり、その意を体した官僚がいて、それによってロシアの文学は政治主義によって曲げられていった。文学だけではなく、音楽も絵画もそうです。ショスタコーヴィチの回想やソプラノ歌手のヴィシュネフスカヤの回想などを読むと、音楽もひどいことになっていたのだと思います。文学もソルジェニーツィンの言葉を待つまでもなく、本当にいろいろな目にあって、自由に伸びることを阻害されたということを感じます。しかし、そんな状況の中で、絵本のあつ部分に関しては生き活きと生き延びることもできたのではないかと思っています。もちろんつまらない本もたくさんあったでしょうが。

つまり児童文学の中でも上級向きのものにはイデオロギーが入りやすいけれど、幼年向きのものには、いわば人間の永遠がある。あるいは、私は児童文学と大人の文学の違いを聞かれた時には、自然と社会の割合だと返事をします。生まれたばかりの子どもは自然100%で、その反対の極は社会100%です。社会100%とは、城山三郎の「小説日本銀行」というような経済小説です。経済の仕組みそれ自体が文学になってしまうものです。自然100%の本は幼児用の絵本です。両極の間はグラデーションのように割合がわかれていっているのではないかというのが、私の考えです。純文学は、おそらくその真ん中あたりで、恋愛小説は、もう少し自然よりで、自然90%くらいでしょうか。あるいは、自然と社会のせめぎあいかもしれません。結婚の制度や不倫なども、社会と人間の欲望や本能とのせめぎあいのようなものですから。私はこの構造をいつも頭に思い浮かべています。その時に、児童文学の中の幼年は、自然100%です。巣穴から出てきたきつねの子どもがはじめて見た世界からはじまっていく、というように思います。そうすると、やはり絵本の世界は活き活きしていると思います。

日本の出版界の場合、児童文学が本格的に姿を現すのは1960年頃からのことだと思います。それまでも、大衆児童文学に属する少年、少女の雑誌はたくさん出ていました。それ以前にも児童文学の雑誌も出ていますが、みんなつぶれてしまいます。新潮社から「銀河」という雑誌を山本有三が出しますが、これはなんと、人間の目は横に動くようにできているということで横組です。当時としては一種の理想主義ですね。ヨーロッパの人は横組の方が読みやすいでしょうが、日本人はずっと縦組で読んできているので、横組だったためにまず売れなかったということがあったと思います。「銀河」がつぶれ、「少年少女の広場」がつぶれ、理想的な児童文学の雑誌がつぶれてしまいます。

その後、日本経済が復興し、ある程度経済的な力がついてきた1960年頃からは優れた児童文学を出すことができるようになりました。その時に頑張ったのが、岩波書店、理論社、福音館書店です。特に福音館書店は当時小さな家を借りているような出版社で、社員も少

なかったのですが、松居直さんという若い編集長が「こどものとも」という雑誌を出しはじめます。これは月刊の絵本です。1冊30円で毎月配本する。1回目が堀文子さんの「ビップとちょうちょう」という絵本でした。私も覚えています。同級生の内田路子さんは、福音館で絵本を作る助手のアルバイトをしていて、ある日、「私今こういう雑誌を作っているので予約してとってくれませんか」と雑誌を持ってやってきたのです。当時私は、慶応の中等部を受験する子どもの家庭教師をやっている、そこに、ペペというあだ名の小学校前のかわいい女の子がいて、私はその子のために1冊30円で月刊の雑誌を6ヶ月とってあげました。予約して180円です。安いものです。その「こどものとも」が以後発展して、今も出続けています。

松居さんは、須田国太郎という絵描きの甥っ子さんだったということもあってか、絵を見る力がとてもあったのです。いい絵本を日本の子どもたちに与えたいと一生懸命やっていたのです。いわばその結実だったのです。その中で、今度は単行本が出るようになり、その時出た単行本にロシアの絵本がたくさんありました。

たとえば、1962年に出たバスネツォフの「3びきのくま」です。表紙を皆さんにお見せします。これはレフ・トルストイが再話をした、フランスの話らしいのですが、なんとも愉快的な話です。ロシア人の描いたくまは、本当にかわいいです。どの絵本を見ても、ロシアのくまにはかなわない気がします。女の子が3びきのくまの家に入ってきて、さんざん勝手なことをして逃げていってしまい、くまたちは呆れて驚いて見ているという話です。子どものくまのスープが全部飲まれてしまったりします。

ラチョフの「てぶくろ」は1965年です。最初はてぶくろが一つだけ落ちているのですが、寒いので動物たちが入り込み、だんだんそのてぶくろがふくらんだ家になっていきます。はしごがかかったり、つかえ棒が出てきたり、ページを捲るごとにだんだん巨大化して、やって来る動物も最初にかわいいのですが、いのししや狼もやってくるようになります。みんな一緒に中に入ってしまう。寒いロシアの冬を、てぶくろの中でみんなで仲良く暮らせば暖かいという、<sup>マロース</sup>厳寒なんて問題ではないというような愉快的な話です。この絵本には、本当に感心して楽しませてもらいました。この「てぶくろ」は今でも大好きです。これは内田莉莎子さんの訳で、1965年の刊行です。

1963年に、マルシャークの「しずかなおはなし」というはりねずみの話があります。レーベジェフが絵を描いています。1962年に、ブラトフの文章で、ラチョフが絵を描いた「マーシャとくま」。ばかなくまが女の子にしてやられてしまいます。私とうちの奥さんみたいな感じですね。60年代というのは冷え切っているところがありましたから、そんな具合に福音館が次々に傑作絵本を出してくれてうれしかったです。私は55年に入学して59年に卒業した学生だったので、60年代はまだお金がなくて、いつもびーびーしていました。勤めていると、編集長に「おまえそのシャツをきてくるな」と言われ、なぜかという、「そんな色のシャツは見たくないから」だそうで、ところが私は替わりのシャツをもっていなかったのです。そういうと編集長は呆れていました。そういう時代でした。ずいぶん勝手な

ことを言う編集長でしたが、86歳でいまだにお元気です。

福音館がこの時代にやったこととは、第二の『赤い鳥』だったのかと思います。福音館と岩波と理論社と講談社の4社が中心となって、戦後の『赤い鳥』のような、いわば児童文学の変革をやった。そういう中でこういう本に出会うことができたわけです。かたや大人の絵を見ると、「コルホーズの朝」なんていう絵が展覧会に出てくるのです。こちらは興ざめしてしまいます。コルホーズの朝の絵なんて見たくないです。

ところが、こういう絵本を見ていると、子どもがかわいがられている感じがあった。子どもが愛されている。ロシア人、特に子どもの絵を描いた絵描きたちは、子ども好きだと思わせるような非常に温かいものを感じます。

もちろん、どこの国の児童文学も基本的にはそういうものを持っています。しかし、私はロシアに対しては少し印象の悪い部分があります。それは、戦後のソヴィエト軍占領下の中国の長春という街にいたことがあるので、その時に彼らがいかに野蛮で非文明的な人間であるかを知ってしまったからです。女性は、女だということがわかると大変なので、みんな怖くて頭を坊主にしていました。ずいぶん色の白い少年かと思うと、それは女性でした。そういう中で生きていました。兵隊は時計の巻き方も知らないような人たちですから、ロシア人は荒々しい人たちだと思っていました。私の中には、たくさんのロシアとソヴィエトがあって、その矛盾した中で生きていたのですが、ロシアの絵本は私に非常に温かいものをくれたと、印象深く残っていました。それから私は、だんだん大人の文学の方で忙しくなってしまう、児童文学のウォッチャーとしてはだんだん離れていってしまいます。

1980年頃、丸善で児童絵本の原画展が開かれました。見に行つて感想を書いてほしいと頼まれました。その時に、ロシアの画家で、真っ赤なとさかをした強烈な印象の鶏を描いている人がいました。これは童画といえるかはわかりませんが、とにかく奔放なエネルギーを感じました。それが、マーヴリナという絵描きでした。私ははじめてマーヴリナの絵を見ました。それが強烈に印象に残っていました。その後、日本で紹介されたマーヴリナの絵本と私は出会うようになって、また最近何冊かマーヴリナの絵本が出ました。近代的なものというよりもむしろ土俗的なロシアで、しかも非常に自由に奔放に描きながら、どこかロシアの土俗やアイコンやビザンチンの臭いのするような世界です。ここにマーヴリナの「ちょうちょ」があります。これにはたくさんの蝶が描かれています。日本でも軽井沢や高原の方にいるツマキチョウも載っていますし、キアゲハは当然載っている本です。フランス語では、チョウのことを昼の蝶と夜の蝶とを言い分けていますが、ロシアではどうでしょうか。夜の蝶は蛾のことですが、この本では蝶も蛾も一緒になっているような気がします。非常にのどかな田園の風景の中で蝶が飛んでいたり、馬や鶏がいたり、奔放ないろいろな風景が描かれていて楽しい本です。

もう1冊ご紹介するのは、ネット武蔵野から最近出たばかりの「メルヘンアルファベット」という絵本です。ロシアの<アーズブカ>といいますがアルファベットの本です。ABC

の本ですが、趣向がこらしてあります。アルファベット一文字ごとに、その字をタイトルに含む昔話が対応していて、それは誰でも知っているような話になっています。一字一字見ながら、先生やお母さんがそのお話をしてくれたりいいというような本です。ロシア文字に慣れない方には見難いかもしれませんが、全部金で描かれているのでいかにも土俗のロシアの本という感じがよく出ています。これは色彩がとてもいい本です。展示されている原本は、造幣局で刷ったものです。日本もそうですがロシアでも造幣局の印刷というのは、簡単に偽札をつくられては困るので、最高の印刷力のあるところなんです。そこで刷ったのですから贅沢な本です。日本でこういう本が出たのは素晴らしいことだと思います。文化財のようなものです。ロシア絵本の好きな人には、こういう本を持ってほしいと思います。私も戴いて持っています。

子どもの絵本の世界は、どんな時代がきてもその時代の中で強く生きていくことができる世界です。私は、子どもの本の仕事はなるべく学年の高いものはしたくないという気持ちでいるので、実に難しい分野ですがやはり絵本と幼年童話が一番すべき仕事だと思っています。ロシアがその分野で、あるいは自然文学の中で生き延びてきたのは、ロシア文学の中で太い動脈のようなものとなっていたためで、たとえ上部構造が少し歪んでも大丈夫だと今までは見ていました。ただこれからのロシアがどうなっていくかはわかりません。おそらくロシアにもグローバリゼーションの法則が働いてきていて、その中でこれからの児童文学がどうなっていくかは、日本の児童文学がどうなっていくかわからないことと同じようにわかりません。

最後に一つ付け加えさせていただくとすれば、こういう仕事をやってきた人たちについてです。ロシア文学を紹介したり、研究したりしてきた人たちは、みんなネットワークを作ってきたところがあります。能や狂言、歌舞伎の世界と似ていて、家業でしているところがあります。たとえば、中村白葉、中村融先生がいたり、米川正夫先生のところには、米川哲夫先生、和夫先生がいたり、親から子につながっていくということです。ロシアの翻訳の児童文学の場合にも同じことが言えると思います。ロシアの児童文学紹介の中で一番頑張ったのは、内田莉莎子さんだと私は思います。内田莉莎子さんのお祖父さんは内田魯庵さんです。内田魯庵というと英訳からですが「罪と罰」や「復活」などを翻訳しています。お父さんは、内田巖さんという絵描きさんです。内田巖さんは左翼の画家でした。若い人にとっても人気がありました。そのお嬢さんが、内田莉莎子さんと、路子さんです。先ほどの話で、私と同級生だった内田路子さんです。つまり絵本を私に売りつけた美女が内田莉莎子さんの妹さんです。莉莎子さんのご主人は、吉上昭三さんというロシア文学者です。路子さんが結婚したのは、堀内誠一さんという児童文学でいい仕事を残した画家です。そういう枝葉のようなつながりがあります。内田家は複雑にロシア文学と児童文学が入り混じっている家系です。しかも、私が「ロシア、ポーランド学派」とからかったりしていたくらい、莉莎子さんも吉上さんも、ポーランド文学にも関心をもっていらっしゃいました。木村先生のお弟子さんたちが、そういうグループをつくって多くのポーランド文

学の紹介もしていました。

あるいは、私の恩師で、高等学校の時に文学の面倒をみてくれた高杉一郎先生は、英文学の出身ですがロシア語も堪能で、ロシア語からの翻訳もいくつかあります。お嬢さんが3人ともロシアの児童文学や絵本に関わっています。田中泰子さん、佐野朝子さん、中川素子さんです。中川素子さんは、絵本のことでは大変ラジカルな論陣をはっていて面白い方です。田中泰子さんは「カスチャール」という雑誌を主催して、ロシアの児童文学を盛り立てていらっしゃる方です。マーヴリナの仕事にも積極的に紹介してくれています。泰子さんのお嬢さんの友子さんも、ロシアの児童文学をやっています。

今回の展覧会で積極的に頑張ってくれた松谷さやかさんは、お父さんが山本和夫さんという詩人で児童文学者です。お母さんの山本藤枝さんも児童文学者です。露木陽子さんというペンネームでもお仕事をされていました。

その露木陽子さんが書かれた『フェアブル』があります。これを読んで昆虫がすっかり好きになり、昆虫オタクになってしまったのが奥本大三郎さんです。奥本大三郎さんが最初にフェアブルに触れたのが、露木陽子の本でした。それから彼は昆虫が好きになったと私に告白しました。奥本さんは現在は「フェアブルの会」の会長で、アマチュアの昆虫学者としては最先端をいっている人です。それが、1冊の本からスタートしていると思うと、やはり児童文学というのは素晴らしいけど怖いなと思います。私ももしかすると、イリンの「灯火の歴史」や、バイコフの「偉大なる王」と出会わなければ違っていたかもしれないうし、「少年文学集」と出会わなければ違っていたのかと思うわけです。

また、いわばそういう、人のネットワークがあって、日本のロシア学というのは戦後でこそある程度官でも、北海道大学や、東京大学でもロシアをやるようになりましたが、戦前は東京外国語学校とあとは軍関係のところしかロシア語をやるところがなかった。いわば文化の支え手は常に民間にあった。民の人たちが頑張ってやっていたということです。それが、今述べたような人のネットワークをつくったのだと感じています。

まとまりのない話になりましたが、ご静聴ありがとうございました。